■財宝神クベーラ

クベーラは、インド神話における富と財宝の神です。

クベーラは、ヴェーダの時代にも名前が見えますが、神となるのはヒンドゥー教の時代になってからです。地下に埋蔵されている財宝の守護神であり、彫刻などでは太鼓腹の目立つ姿で描かれます。

クベーラは、ヴィスヴェーシュヴァラの子で、ヤクシャ（夜叉）族の王とされます。ラークシャサ（羅刹）族の王であるラーヴァナとは、異母兄弟に当たります。

クベーラは、千年の修行がブラフマー神に気に入られ、神となることができ、さらに天を飛行する戦車プシュパカ・ラタを授かります。

ランカ島（セイロン島）を都としますが、異母兄弟ラーヴァナと対立して島を追われ、また戦車プシュパカ・ラタをも奪われます。

シヴァ神と親しく、ヒマラヤのカイラス山にある都アラカーに居住します。ヤクシャ（夜叉）をはじめ、ガンダルヴァ（乾闥婆）、ラークシャサ（羅刹）など多数の半神族がクベーラにかしずき、都は栄光と壮麗さに満ちていたとされます。

クベーラは、ローカパーラの一柱として、北の方角を守護します。仏教ではクベーラの父の名に由来するヴァイシュラヴァナという呼称が「多聞天」と漢訳され、また、「毘沙門天」と音写されます。

**クベーラ**（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): कुबेर, Kubēra）は、[インド神話](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E7%A5%9E%E8%A9%B1" \o "インド神話)の富と財宝の[神](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A5%9E)（[デーヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%87%E3%83%BC%E3%83%B4%E3%82%A1)）。**ヴァイシュラヴァナ**（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): वैश्रवण, Vaiśravaṇa）ともいい、これは「ヴィシュラヴァの子」を意味する。その名の通り[ヴィシュラヴァ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%A9%E3%83%B4%E3%82%A1&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Vishrava)）の子で、[プラスティヤ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%97%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%A4&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Pulastya)）の孫。[ナラクーバラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8A%E3%83%A9%E3%82%AF%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%A9)、マニグリーヴァの父。[ヤクシャ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9C%E5%8F%89)族の王とされ、[ラークシャサ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%82%B5)族の王である[ラーヴァナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%8A)とは異母兄弟に当たる。

クベーラは地下に埋蔵されている財宝の[守護神](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%88%E8%AD%B7%E7%A5%9E" \o "守護神)であり、また[ローカパーラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%82%AB%E3%83%91%E3%83%BC%E3%83%A9)の一人として北方の守護神とされる。

[シヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B7%E3%83%B4%E3%82%A1)神と親しく、[カイラス山](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%A4%E3%83%A9%E3%82%B9%E5%B1%B1)にある都**アラカー**に居住して、ヤクシャをはじめ[ガンダルヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%AB%E3%83%B4%E3%82%A1)、[ラークシャサ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%82%B5)など多数の半神族にかしずかれている。千年の修行が[ブラフマー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%96%E3%83%A9%E3%83%95%E3%83%9E%E3%83%BC)神に気に入られ、神となることができ、さらにプシュパカ（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): पुष्पक, puṣpaka）という[ヴィマーナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%8A" \o "ヴィマーナ)を授かった。もともとラークシャサの居城があった[ランカー島](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%B3%E3%82%AB%E3%83%BC%E5%B3%B6)を都としたが、後にラーヴァナとの対立によってカイラス山に退き、またプシュパカをも奪われる。

クベーラは以下の著名な9つの財宝（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): निधि, Nidhi）がある[[1]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9" \l "cite_note-1)。

1. 亀（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): कच्छप, Kacchapa）
2. [スイレン](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%82%A4%E3%83%AC%E3%83%B3)（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): कुमुद्, Kumud）
3. [ジャスミン](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B8%E3%83%A3%E3%82%B9%E3%83%9F%E3%83%B3)（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): कुन्द, Kunda）
4. 麝香薔薇（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): खर्व, Kharva）
5. [マカラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%82%AB%E3%83%A9)（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): मकर, Makara）
6. [藍](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%97%8D)（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): नील, Nīla）
7. 巻貝（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): शंख , Śaṇkha）
8. 蓮華（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): पद्म, padma）
9. 大蓮華（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): महापद्म, Mahāpadma）

クベーラに言及する最も古いものは『[アタルヴァ・ヴェーダ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%82%BF%E3%83%AB%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%BB%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%BC%E3%83%80)』[[2]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9#cite_note-2)で、異名のヴァイシュラヴァナも併称されており、ラジャタナービー(rajatanābhi)という名の子孫がいる[[3]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9" \l "cite_note-3)[[4]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9#cite_note-4)。その連の内容はクベーラと*隠蔽*（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): तिरोधा, tirōdhā）の関係を詠んだものである。

『[バーガヴァタ・プラーナ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%AC%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%82%BF%E3%83%BB%E3%83%97%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%8A&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Bhagavata_Purana)）』でのナラクーバラとマニグリーヴァは、ヤクシャではなく[グーヤカ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%B0%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%82%AB&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/guhyaka)）（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): गुह्यक, guhyaka）であり、このグーヤカは「秘密（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): गुह्य, guhya）にするもの」を意味し、仏典では「密迹」と漢訳されている。そして、父のクベーラ自身はグーヤカディパティー（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): गुह्याकाधिपती, guhyākādhipatī）やニディグーヤカーディパ（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E" \o "サンスクリット語): निधिगुह्यकाधिप, nidhiguhyakādhipa）という尊称で呼ばれており、それぞれ「グーヤカの主」と「財宝とグーヤカの主」を意味する。これらから、*クベーラ*の語源を「覆う、隠す」（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): कुम्ब्, kumb）とする説がある[[5]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9" \l "cite_note-5)。

**外見的な特徴[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9&action=edit&section=2)**]**

[図像学](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%B3%E5%83%8F%E5%AD%A6)の観点では、クベーラは黄色で表現されて、[ヴァーハナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%BC%E3%83%8F%E3%83%8A)が動物ではなく人間(またはヤクシャなどの人間の姿をした存在)という特徴がある[[6]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9" \l "cite_note-6)[[](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9#cite_note-7)

[仏教](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8F%E6%95%99)では主に異称のヴァイシュラヴァナで知られ、漢訳の際にヴァイシュラヴァナを意訳した名前が[多聞天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E8%81%9E%E5%A4%A9)で、ヴァイシュラヴァナを音写した名前が[毘沙門天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9)である。[四天王](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%9B%E5%A4%A9%E7%8E%8B)の多聞天が北方の守護を担うのはクベーラが北方のローカパーラであることに由来している。

詳細は「[毘沙門天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9)」を参照

[薬師如来](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%96%AC%E5%B8%AB%E5%A6%82%E6%9D%A5)の[十二神将](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%81%E4%BA%8C%E7%A5%9E%E5%B0%86)の筆頭・宮比羅（くびら）とよく混同されるが、由来は全く異なる。宮比羅はヒンドゥー教の[ガンジス川](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AC%E3%83%B3%E3%82%B8%E3%82%B9%E5%B7%9D)の神[クンビーラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%AE%E6%AF%94%E7%BE%85)が仏教に取り入れられたものであるが、クンビーラとクベーラは名前が似ているだけで、両者は全くの別の神である。

ローカパーラは「世界を守るもの」の意味で、インド神話における4方位または8方位のそれぞれにある神の総称である。 また、ローカパーラは[仏教](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8F%E6%95%99" \o "仏教)における[十二天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%81%E4%BA%8C%E5%A4%A9)の原型とされている。ただし[ヴェーダ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%BC%E3%83%80)の成立年代によってその内容は多様に変化するため必ずしも仏教の十二天と一致しない場合がある。

『**マハーバーラタ**』（[サンスクリット語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E8%AA%9E): **महाभारतम्** *Mahābhārata*）は、古代[インド](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89" \o "インド)の宗教的、哲学的、神話的[叙事詩](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%99%E4%BA%8B%E8%A9%A9)。[ヒンドゥー教](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%92%E3%83%B3%E3%83%89%E3%82%A5%E3%83%BC%E6%95%99)の聖典のうちでも重視されるものの1つで、[グプタ朝](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B0%E3%83%97%E3%82%BF%E6%9C%9D" \o "グプタ朝)の頃に成立したと見なされている[[注釈 1]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF#cite_note-2)。「マハーバーラタ」は、「[バラタ族](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%83%A9%E3%82%BF%E6%97%8F" \o "バラタ族)の物語」という意味であるが、もとは単に「[バーラタ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%83%A9%E3%82%BF%E6%97%8F)」であった。「マハー（偉大な）」がついたのは、神が、4つの[ヴェーダ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%BC%E3%83%80" \o "ヴェーダ)とバーラタを秤にかけたところ、秤はバーラタの方に傾いたためである[[](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF#cite_note-3)

『マハーバーラタ』は[世界3大](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%96%E7%95%8C%E4%B8%89%E5%A4%A7%E4%B8%80%E8%A6%A7" \o "世界三大一覧)[叙事詩](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%99%E4%BA%8B%E8%A9%A9)の1つとされる（他の2つは、[イーリアス](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%BC%E3%83%AA%E3%82%A2%E3%82%B9" \o "イーリアス)、[オデュッセイア](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AA%E3%83%87%E3%83%A5%E3%83%83%E3%82%BB%E3%82%A4%E3%82%A2)）。『[ラーマーヤナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%83%9E%E3%83%BC%E3%83%A4%E3%83%8A" \o "ラーマーヤナ)』と並び、インド2大[叙事詩](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8F%99%E4%BA%8B%E8%A9%A9" \o "叙事詩)の1つでもある。 原本は[サンスクリット](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88)で書かれ、全18巻、100,000詩節[[注釈 2]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF" \l "cite_note-6)、200,000行を超えるとされる。これは[聖書](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%81%96%E6%9B%B8" \o "聖書)の4倍の長さに相当する[[注釈 3]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF#cite_note-8)。

物語は世界の始まりから始まる。その後、物語は[パーンダヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%B4%E3%82%A1)族と[カウラヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%A6%E3%83%A9%E3%83%B4%E3%82%A1)族[[注釈 4]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF#cite_note-10)[[注釈 5]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF#cite_note-11)（この二つを合わせてバラタ族（バーラタ））の争いを軸に進められ、物語の登場人物が誰かに教訓を施したり、諭したりするときに違う物語や教典などが語られるという構成で、[千夜一夜物語](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%83%E5%A4%9C%E4%B8%80%E5%A4%9C%E7%89%A9%E8%AA%9E" \o "千夜一夜物語)と似た構成になっているが、大きな相違点としてパーンダヴァ王家とカウラヴァ王家の争いの話自体が語られる物語であることがあげられる。 数々の宗教書も『マハーバーラタ』の物語の登場人物をして語らせることも多く、『[バガヴァッド・ギーター](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%82%AC%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%83%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%AE%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC)』は著名な部分であり、宗教上、特に重視されている。

**内容[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%9E%E3%83%8F%E3%83%BC%E3%83%90%E3%83%BC%E3%83%A9%E3%82%BF&action=edit&section=3)**]**

[パンチャーラ国](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%B3%E3%83%81%E3%83%A3%E3%83%BC%E3%83%A9%E5%9B%BD)には[ドルパダ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%83%AB%E3%83%91%E3%83%80)王子と仲の良い[ドローナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%8A)という少年がおり、[ヴェーダ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A7%E3%83%BC%E3%83%80)をともに学んでいた。やがてドルパダは国王になると、ドローナに「幼い頃は我らの間に友情があったが、国王とそうでない者との間に友情は成り立たない」と諭した。ドローナはパンチャーラ国を後にすると[クル族](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AB%E6%97%8F)の[パーンダヴァ国](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%B4%E3%82%A1)に入り、やがて首都の[ハスティナープラ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%8F%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%AB&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Hastinapur)）で腰を落ち着けた。ある日、5人の王子達が困っているところに出くわし助けたところ、請われてある条件と引換に教師になることに同意した。弟子には、5人の王子達（[ユディシュティラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A6%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%A9" \o "ユディシュティラ)、[ビーマ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%93%E3%83%BC%E3%83%9E)、[アルジュナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%83%8A)、[ナクラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8A%E3%82%AF%E3%83%A9)、[サハデーヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%8F%E3%83%87%E3%83%BC%E3%83%B4%E3%82%A1)）の他に[カルナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%8A" \o "カルナ)が居た。ドローナは彼らに戦い方を教えると、かねてからの約束通り、ドルパダ王を捕らえるように願い出た。弟子達はパンチャーラ国に攻め入り、ドルパダ王を捕まえた。ドローナが「国王とそうでない者との間に友情は成り立たないのだから、君の国を奪ったのだよ」と言い放ったが、ドルパダ王の懇願を受け入れ、ガンジス川の北をドルパダ王に返還し、南にドローナの国を作ってパンチャーラ国を分割した。ドルパダ王はいつかこの屈辱を晴らすために[ヤグナ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%A4%E3%82%B0%E3%83%8A&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Yajna)）を行うと、双子の兄妹（[ドゥリシュタデュムナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%82%A5%E3%83%AA%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%82%BF%E3%83%87%E3%83%A5%E3%83%A0%E3%83%8A" \o "ドゥリシュタデュムナ)と[ドラウパディー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%83%91%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%BC)）が生まれた。

[ドラウパディー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%83%A9%E3%82%A6%E3%83%91%E3%83%87%E3%82%A3%E3%83%BC)が絶世の美女に成長すると、ドルパダ王は花婿選びを開催した。カルナは優れた弓の名手ではあったが[クシャトリヤ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%83%88%E3%83%AA%E3%83%A4)以上の階級という条件に合わなかったため[アルジュナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A2%E3%83%AB%E3%82%B8%E3%83%A5%E3%83%8A)が勝利すると、パーンダヴァの5王子はドラウパディーを連れて家に帰った。アルジュナの母[クンティー](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%B3%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%BC" \o "クンティー)は忙しくしていたため、アルジュナがドラウパディーの花婿選びで勝ったという5王子の報告を、托鉢して施物を集めてきたものと勘違いし、兄弟で等しく分かち合うよう言った。こうしてドラウパディーは5王子が共有する妻になった。また、アルジュナは転生した[インドラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%A9" \o "インドラ)である。

ユディシュティラが大きくなると、父王[パーンドゥ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%91%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%89%E3%82%A5" \o "パーンドゥ)の跡を継いでいた叔父の盲目王[ドゥリタラーシュトラ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%89%E3%82%A5%E3%83%AA%E3%82%BF%E3%83%A9%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%88%E3%83%A9&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Dhritarashtra)）は[クル国](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AB%E5%9B%BD)の半分をユディシュティラに与えた。ユディシュティラは[カーンダヴァ森](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%AB%E3%83%BC%E3%83%B3%E3%83%80%E3%83%B4%E3%82%A1%E6%A3%AE&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Khandava_Forest)）の[インドラプラスタ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E3%83%A9%E3%83%97%E3%83%A9%E3%82%B9%E3%82%BF&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Indraprastha)）の王宮に住むようになった。盲目王の子[ドゥルヨーダナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%89%E3%82%A5%E3%83%AB%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%83%80%E3%83%8A)は5王子の幻想宮殿を訪ねたとき、水の中に落ちてしまい、ドラウパディーの女中達がそれを喜んで眺めた。元々次の国王は自分だと思っていたドゥルヨーダナは、この扱いに激怒して陰謀を巡らす。ドゥルヨーダナこそ悪魔[カリ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%AB%E3%83%AA_(%E6%82%AA%E9%AD%94)&action=edit&redlink=1" \o "カリ (悪魔) (存在しないページ))（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Kali_(demon))）の転身である。ドゥルヨーダナの怒りを知った[ビーシュマ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%93%E3%83%BC%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%9E)は、首都[ハスティナープラ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%83%8F%E3%82%B9%E3%83%86%E3%82%A3%E3%83%8A%E3%83%BC%E3%83%97%E3%83%A9&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Hastinapur)）を分割してユディシュティラに与え、平和を維持することを提案した。[カウラヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%A6%E3%83%A9%E3%83%B4%E3%82%A1)の[シャクニ](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%B7%E3%83%A3%E3%82%AF%E3%83%8B&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Shakuni)）が謀った[サイコロ賭博事件](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%B5%E3%82%A4%E3%82%B3%E3%83%AD%E8%B3%AD%E5%8D%9A%E4%BA%8B%E4%BB%B6&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Shakuni#Chausar.2C_the_game_of_dice)）が起こり、ユディシュティラは全てを巻き上げられ、王国も失ってしまう。ユディシュティラは、妻ドラウパディーすら賭けで失い、彼女は奴隷にされた。かつて身分の違いを理由に袖にされた[カルナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%83%AB%E3%83%8A)は、落ちぶれた姿を目にして奴隷女と罵った。

サイコロ賭博事件の結果、5王子は13年間に渡る森の中での逃亡生活を強いられた。

その後、パーンダヴァ王家は5王子達[カウラヴァ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AB%E3%82%A6%E3%83%A9%E3%83%B4%E3%82%A1)王家からの王国奪還を要求し対立が深まった。アルジュナが師ドローナに弓引く戦争をためらっていると、いとこの[クリシュナ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%8A)が自分の正体が[ヴィシュヌ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%B4%E3%82%A3%E3%82%B7%E3%83%A5%E3%83%8C)であることを証し、「道徳的義務を遂行する自分の[ダルマ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%80%E3%83%AB%E3%83%9E)を果たすべきで、友人や知人の死で苦しんではならない。彼らは肉体の死によってその病んだ魂を純粋平和な世界へ開放することが出来るのだから」と説いた（『[バガヴァッド・ギーター](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%90%E3%82%AC%E3%83%B4%E3%82%A1%E3%83%83%E3%83%89%E3%83%BB%E3%82%AE%E3%83%BC%E3%82%BF%E3%83%BC)』）。

[クルクシェートラの戦い](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E3%82%AF%E3%83%AB%E3%82%AF%E3%82%B7%E3%82%A7%E3%83%BC%E3%83%88%E3%83%A9%E3%81%AE%E6%88%A6%E3%81%84&action=edit&redlink=1)（[英語版](https://en.wikipedia.org/wiki/Kurukshetra_War)）でカウラヴァ王家は全滅する。カルナはアルジュナによって殺され、昇天して[太陽神](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%AA%E9%99%BD%E7%A5%9E" \o "太陽神)[スーリヤ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B9%E3%83%BC%E3%83%AA%E3%83%A4)と一体化した。ドゥルヨーダナはビーマに殺された。ドローナは、ユディシュティラに捕まえられたところをドゥリシュタデュムナに殺され、悲報を聞いたアルジュナは師の死を悼んだ。

**毘沙門天**（びしゃもんてん、梵名: **ヴァイシュラヴァナ**、[梵](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%B5%E3%83%B3%E3%82%B9%E3%82%AF%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88): वैश्रवण, Vaiśravaṇa）は、[仏教](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8F%E6%95%99" \o "仏教)における[天部](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A9%E9%83%A8)の[仏](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BB%8F)神で、[持国天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%8C%81%E5%9B%BD%E5%A4%A9)、[増長天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A2%97%E9%95%B7%E5%A4%A9)、[広目天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%BA%83%E7%9B%AE%E5%A4%A9)と共に[四天王](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9B%9B%E5%A4%A9%E7%8E%8B)の一尊に数えられる武神であり、四天王では**多聞天**として表わされる[[1]](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9#cite_note-1)。また四天王としてだけでなく、中央アジア、中国など日本以外の広い地域でも、独尊として信仰の対象となっており、様々な呼び方がある。[種子](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%A8%AE%E5%AD%90_(%E5%AF%86%E6%95%99)" \o "種子 (密教))はベイ（vai）。

**インド[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9&action=edit&section=2)**]**

[インド神話](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%A4%E3%83%B3%E3%83%89%E7%A5%9E%E8%A9%B1)の財宝神[クベーラ](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%82%AF%E3%83%99%E3%83%BC%E3%83%A9)を前身とする。ヴァイシュラヴァナという称号は本来「ヴィシュラヴァス (viśravas) 神の息子」という意味で、彼の父親の名に由来する。

インドにおいては財宝神とされ、戦闘的イメージはほとんどなかった。この頃の性格についてはクベーラの項を参照。

**中国[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9&action=edit&section=3)**]**

中央アジアを経て中国に伝わる過程で武神としての信仰が生まれ、四天王の一尊たる武神・守護神とされるようになった。毘沙門という表記は、ヴァイシュラヴァナを中国で音写したものであるが「よく聞く所の者」という意味にも解釈できるため、**多聞天**（たもんてん）とも訳された。[帝釈天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B8%9D%E9%87%88%E5%A4%A9)の配下として、仏の住む世界を支える[須弥山](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%A0%88%E5%BC%A5%E5%B1%B1)の北方、水精埵の天敬城に住み、或いは古代インドの世界観で地球上にあるとされた4つの大陸のうちを守護するとされる。また、[夜叉](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9C%E5%8F%89)や[羅刹](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%BE%85%E5%88%B9)といった鬼神を配下とする。また、密教においては[十二天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%81%E4%BA%8C%E5%A4%A9)の一尊で北方を守護するとされる。

**日本[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9&action=edit&section=4)**]**

日本では四天王の一尊として造像安置する場合は「多聞天」、独尊像として造像安置する場合は「毘沙門天」と呼ぶのが通例である。庶民における毘沙門信仰の発祥は[平安時代](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B9%B3%E5%AE%89%E6%99%82%E4%BB%A3)の[鞍馬寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9E%8D%E9%A6%AC%E5%AF%BA)である。鞍馬は北陸[若狭](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%8B%A5%E7%8B%AD%E5%9B%BD)と山陰[丹波](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%B9%E6%B3%A2%E5%9B%BD)を京都と結ぶ交通の要衝でもあり古くから[市](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B8%82)が栄え、自然と鞍馬寺の毘沙門天の本来の神格である財福の神という面が強まり、また[9世紀](https://ja.wikipedia.org/wiki/9%E4%B8%96%E7%B4%80)頃からは正月の[追儺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%BF%BD%E5%84%BA)において、疫病を祓う役どころがかつての[方相氏](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%96%B9%E7%9B%B8%E6%B0%8F)から毘沙門天と[竜天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%AB%9C)のコンビに変わっていったことから無病息災の神という一面が加わる。平安時代末期には[エビス](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%88%E3%81%B3%E3%81%99)の[本地仏](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%AC%E5%9C%B0%E4%BB%8F)ともされ、日本では毘沙門天は甲冑をつけた姿が主流となるがこの姿はエビス神の古い形態でもあり、このことは市場で祀られたことと関係がある。こうして福の神としての毘沙門天は中世を通じて[恵比寿](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%81%88%E3%81%B3%E3%81%99)・[大黒](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A7%E9%BB%92)にならぶ人気を誇るようになる。[室町時代](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%A4%E7%94%BA%E6%99%82%E4%BB%A3)末期には日本独自の信仰として[七福神](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%83%E7%A6%8F%E7%A5%9E)の一尊とされ、[江戸時代](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B1%9F%E6%88%B8%E6%99%82%E4%BB%A3)以降は特に勝負事に利益ありとして崇められる。

**像容[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9&action=edit&section=5)**]**

[](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%95%E3%82%A1%E3%82%A4%E3%83%AB:Jikoji_tamonten.JPG)

多聞天像（[高砂市](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E7%A0%82%E5%B8%82)[時光寺](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%99%82%E5%85%89%E5%AF%BA&action=edit&redlink=1)）

毘沙門天の姿には[三昧耶形](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E6%98%A7%E8%80%B6%E5%BD%A2)が宝棒（仏敵を打ち据える護法の[棍棒](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%A3%8D%E6%A3%92)）、[宝塔](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AE%9D%E5%A1%94)であるという他には、はっきりした規定はなく、様々な表現がある（[後述](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9#.E6.89.98.E5.A1.94.E6.9D.8E.E5.A4.A9.E7.8E.8B)）。日本では一般に革製の甲冑を身に着けた[唐](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%90)代の武将風の姿で表される。また、[邪鬼](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%82%AA%E9%AC%BC)と呼ばれる鬼形の者の上に乗ることが多い。例えば[密教](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%AF%86%E6%95%99)の[両界曼荼羅](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%A1%E7%95%8C%E6%9B%BC%E8%8D%BC%E7%BE%85)では甲冑に身を固めて右手は宝棒、左手は宝塔を捧げ持つ姿で描かれる。ただし、東大寺戒壇堂の四天王像では右手に宝塔を捧げ持ち、左手で宝棒を握る姿で造像されている。奈良當麻寺でも同様に右手で宝塔を捧げ持っている。ほかに[三叉戟](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E5%8F%89%E6%88%9F)を持つ造形例もあり、例えば京都・[三室戸寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%89%E5%AE%A4%E6%88%B8%E5%AF%BA)像などは宝塔を持たず片手を腰に当て片手に三叉戟を持つ姿である。

また、中国の民間信仰に於いては緑色の顔で右手に傘、左手に銀のネズミを持った姿で表される。[チベット仏教](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%81%E3%83%99%E3%83%83%E3%83%88%E4%BB%8F%E6%95%99)では金銀宝石を吐く[マングース](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%9E%E3%83%B3%E3%82%B0%E3%83%BC%E3%82%B9)を持つ姿で表され、インドでの財宝神としての性格を残している。

独尊、また中心尊としても多くの造形例がある。安置形態としては、毘沙門天を中尊とし、[吉祥天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%90%89%E7%A5%A5%E5%A4%A9)（毘沙門天の妃または妹とされる）と善膩師童子（ぜんにしどうじ。毘沙門天の息子の一人とされる）を脇侍とする三尊形式の像（奈良[朝護孫子寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9C%9D%E8%AD%B7%E5%AD%AB%E5%AD%90%E5%AF%BA)、日本最初毘沙門天出現霊場の[信貴山](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BF%A1%E8%B2%B4%E5%B1%B1)奥の院、京都・[鞍馬寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%9E%8D%E9%A6%AC%E5%AF%BA)、神戸市北区[唐櫃](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%90%E6%AB%83)の[六甲山](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%AD%E7%94%B2%E5%B1%B1)[多聞寺 (神戸市北区)](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%9A%E8%81%9E%E5%AF%BA_(%E7%A5%9E%E6%88%B8%E5%B8%82%E5%8C%97%E5%8C%BA))、高知・雪蹊寺など）、毘沙門天と吉祥天を一対で安置するもの（奈良・[法隆寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B3%95%E9%9A%86%E5%AF%BA)金堂像など）、毘沙門天と[不動明王](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8D%E5%8B%95%E6%98%8E%E7%8E%8B)を一対として安置するもの（高野山[金剛峯寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%87%91%E5%89%9B%E5%B3%AF%E5%AF%BA)像など）がある。

また、[天台宗](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A4%A9%E5%8F%B0%E5%AE%97)系の寺院では、[千手観音](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%83%E6%89%8B%E8%A6%B3%E9%9F%B3)を中尊として両脇に毘沙門天・不動明王を安置することも多い（滋賀・明王院像、京都・[峰定寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B3%B0%E5%AE%9A%E5%AF%BA)像など）。なお[真言宗](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%9C%9F%E8%A8%80%E5%AE%97)系寺院でもこの傾向はある。

四天王の1体として北方（須弥壇上では向かって右奥）を護る多聞天像の作例も数多い。その姿は独尊の毘沙門天像と特に変わるところはないが、左右いずれかの手に宝塔を捧げ持つ像が多い。

国宝指定品としては[東大寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E5%A4%A7%E5%AF%BA)戒壇堂、京都・[浄瑠璃寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B5%84%E7%91%A0%E7%92%83%E5%AF%BA)、奈良・[興福寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%88%88%E7%A6%8F%E5%AF%BA)などの四天王像中の多聞天像がある。

**派生的な姿[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9&action=edit&section=6)**]**

**托塔李天王[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9&action=edit&section=7)**]**

中国では、軍神と称えられた[唐](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%94%90)代初期の武将[李靖](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%8E%E9%9D%96)と習合し、（または単に托塔天王、李天王とも）という尊格が生まれた。托塔とは、前述の宝塔を如来よりあずけられたの意味である。

この托塔李天王は、現在では四天王の多聞天とは別の神と考えられ、むしろ多聞天も含めた四天王を率いる神々の将軍とされている。後に[道教](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%81%93%E6%95%99)でも崇められるようになった。[哪吒三太子](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%8A%E3%82%BF_(%E4%B8%AD%E5%9B%BD%E7%A5%9E%E8%A9%B1))の父として描かれる『[西遊記](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E9%81%8A%E8%A8%98)』の托塔李天王、『[封神演義](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%B0%81%E7%A5%9E%E6%BC%94%E7%BE%A9)』の李靖がこれである。

前述の通り四天王の多聞天は傘などを持った姿で表されるが、托塔李天王は宝塔を持った武将の姿で表される。これは唐代に於いて造形された毘沙門天の古い姿を継承したものである。

**兜跋毘沙門天[**[**編集**](https://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9&action=edit&section=8)**]**

詳細は「[兜跋毘沙門天](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%85%9C%E8%B7%8B%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A4%A9)」を参照

と呼ばれる特殊な像容がある。という鎖を編んで作った鎧を着し、腕にはと呼ぶ防具を着け筒状の宝冠を被る。持物は左手に宝塔、右手に宝棒または戟で、見るからに異国風の像である。また、邪鬼ではなく[地天女](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%9C%B0%E5%A4%A9)及び二鬼（尼藍婆、毘藍婆）の上に立つ姿である。[東寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E5%AF%BA)の兜跋毘沙門天像は、かつて[羅城門](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%BE%85%E5%9F%8E%E9%96%80)の楼上に安置されていたという。

「兜跋」とは[西域](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%A5%BF%E5%9F%9F)兜跋国、即ち現在の[トゥルファン](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%98%E6%98%8C%E5%8C%BA)とする説が一般的で、ここに毘沙門天がこの姿で現れたという伝説に基づく。また「刀抜」「屠半」などの字を宛てることもある。

像容は、東寺像を忠実に模刻したもの（奈良国立博物館像、京都・[清凉寺](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%B8%85%E5%87%89%E5%AF%BA)像など）と、地天女の両手の上に立つ以外は通例の毘沙門天像と変わらないもの（岩手・[成島毘沙門堂](https://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%88%90%E5%B3%B6%E6%AF%98%E6%B2%99%E9%96%80%E5%A0%82)像など）とがある。

